

市長賞

バス停に雨のち晴れの置き忘れ

宮浦 勝登志

【評】置き忘れた「物」を特定していないところが、この句にストーリー性を持たせていて、まさに秀逸。

ひとしきり降った夕立がやみ、雲の間から夏の陽射しが戻ってきた。

バス停にバスが止まり、一人で待っていた客を乗せ走り去った。おや？、バス停のベンチに忘れ物が…。

雨のち晴れ。小さな胸の蟠<sup>たがま</sup>りを置いていったのかもしれない…。